

隱岐の後鳥羽院

— その作歌の周辺 —

寺井淳

(一)

我が国の歴史の上で、後鳥羽院という人物の占める位置は、政治上・文学上を問わず、非常に大きいものがある。政治上では、貴族から武士へ政権が移っていく直前の、最後の「帝王」として。文学上では、文学史の上で短詩型文学の頂点と言つてよい、「新古今和歌集」の編纂者として。院は、宮廷が政治の中心であると同時に、文学(雅び)の中心でもあつた最後の時代を生きた人物である。

一二二一年、承久の乱は、政治が武士の手に渡つたことを、決定的に証明し、三人の上皇はいずれも海を隔てて流罪となつた。以後、あのような時代は再来しない。承久の乱は、都から後鳥羽院を失つたという点で、文学史上でも大きなターニングポイントであつた。大きな柱を失くした都の「文学史」は、衆知の方向へ流れていく。では、後鳥羽院自身はどうか。

院は乱に破れて後、順徳院の佐渡・土御門院の土佐とともに、隠岐の島に配流の身となつた。以後二十年、都に還ることなく、彼の地に没した。その間、おそらくは憂愁に沈みながらも、様々の事績を残している。

その様々の事績の中では、「新古今和歌集」の改訂(いわゆる「隠

岐本新古今和歌集」の編纂)と、歌論書である「後鳥羽院御口伝」が、つとに知られている。これらはどちらも、批評家としての院の名を、後世に高からしめるものではあつたけれど、歌の実作者としての院は、承久の乱以後文学史上からほとんど姿を消していると言つてよい。たとえば、隠岐以後の院の詠を今に伝えている「後鳥羽院御百首」が、現在最高の「新古今和歌集」の研究書と思われる久保田淳氏の「新古今和歌集全評釈」の引用書目解題に載せられていないことをみても、その位置がうかがわれる。

「後鳥羽院御百首」は統群書類従第三百八十六和歌部二十一所収の百首歌である。(実際は百一首)奥書きに「右後鳥羽院御百首以内閣本校合」とある。底本や「内閣本」の年代は解らないが、各歌のほとんどに付されている註記の内に、次のような箇所がある。

難波江やあまたのくは焼わひて煙にしめる五月雨の比(夏四)
けふりにしめるとは制の詞なり。(榜点寺井)

「制詞」の概念が、作歌上の規範として明確化されたのは、藤原家の「詠歌一鉢」であるとされている。群書類従本をみると「このごろ人のよみ出したらんこと葉。さら／＼よむべからず。……加樣のこと葉は。ぬしあること葉なればよむべからず。古歌なりとも。人獨詠じ出して。わがものともちたるをばとらずと申めり。……」

などとある。そのように「けふりにしめる」を「制の詞」とした人物は、為家以後の世代に属している。また、その頃には、流罪の身の院の詠が、都で、歌学者の論評の対象となっていたことを示している。

また、歌の構成をみると、春十九首・夏十六首・秋二十一首・冬十五首・雑三十首に分かれている。四季の各部門の配列は、やはり季節の推移によっている。たとえば、春部は、

霞行たかねを出る朝日かけさすかに春の色を見る哉
に始まり、

物思ふにすくる月日はしらねともはるや暮ぬる岸の山吹
で終わり、更に夏になると、

けふとてや大宮人のかへつらんむかしかたりの夏衣かな
と、衣更え（旧四月一日）に始まり、

みるままにかたへすしき夏衣ひもゆふ露のやまとなしてこ
という具合である。これは、この百首歌が、全体でひとつの作品としてとらえられているということを意味している。

隠岐においての院の詠は、もちろんこの百首にとどまらなかつたはずである。たとえば「増鏡」の「新島守」の段には、院の詠として十二首ほどの歌がしるされているが、その内、次の七首は「後鳥羽院御百首」中になく歌である。

たちねの消やらで待つ露の身を風よりさきにいかでとはまし
八百よろづ神もあはれみたちねの我待ちみんとたえぬ玉のを
浪間なき隠岐の小島のはまびさし久しくなりぬ都へだてて
木枯の隠岐のそま山吹しをり荒くしをれて物おもふ比

水無瀬山我ふる里は荒れぬらむまがきは野らと人もかよはで
限りあればさても堪へける身のうさよ民のわら屋に軒をならべ
て

かざし折る人もあらばや事とはん隠岐の深山に杉は見ゆれど

これらを考え合わせると、この百首歌は、後の人が院の詠を集め、その中から百首を取り出して編集したものと考えてよさそうである。それが、やがて都に伝わり、註が付されて続群書類従本の形になったのであろう。もとの百首歌が編まれたのは、隠岐の地である。続群書類従本の百首歌の原形が「遠島百首」の名で、隠岐の地には様々なに伝わっている。その百首歌と、「後鳥羽院御百首」は、内容がほぼ同一である。「遠島百首」については、「隠岐高校研究紀要」第一号（一九七七）中の「遠島百首私見」の序に、次のように説明されている。

「遠島百首」は後鳥羽上皇が、配流の地隠岐でつくった作品である。後鳥羽上皇の事績は、政治上・文学上を問わず、あまねく知られているところである。しかし、配流後の事績は、「新古今和歌集」の改訂を別とすれば、あまり知られていないように思われる。そのことは、「遠島百首」の存在を知らぬ人が多く、また、その研究が少ないことなどからもうかがえるのである。だが、隠岐の地においては、この作品はしばしばいろいろの書籍に載せられており、少なからぬ関心をもってみられているのである。これらの書籍に載る「遠島百首」はそれぞれ異同があり、系統も違っているようであるが、それぞれが「遠島百首」として世におこなわれている。現在まで、これらの異同は比較・統合されておらず、

また、「遠島百首」の通釈もほとんどなされていないのである。したがって、「遠島百首」ははまだ一般に親しいものとはなっていないのである。……」

両書を比較するため、試みに春・夏部の配列をみようと次のようになる。(統群書類従本の配列を(1)～(9)・(20)～(35)とする。)

「島根県史」「隠岐島誌」本「遠島百首」

- (1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・別歌A・(8)・(10)・(9)・(11)・(12)・別歌B (15)・(13)・(16)・別歌C・(17) (以上春部)

※別歌A…沖つ波たつや霞のたえまにも海士のをふねのはるけくそみゆ

別歌B…わけのほるそて春雨に打しほれみねの桜の色そもうき

別歌B…山姫の霞のそでやしほるらん花こきたれて春雨そふる

- (20)・(24)・(22)・(21)・(25)・(23)・(26)・(29)・(27)・(32)・(31)・(35)・(33)・(30)・(34) (以上夏部。(28)を欠く。)

特に夏部では、収録歌は一首を除いて同じであるが、配列は大幅に違っている。むしろ、より意識的な配列になっているのは「後鳥羽院御百首」の方である。隠岐での百首歌が、都で更に「洗練」される過程がうかがわれる。

以上が、隠岐での後鳥羽院の作歌を伝える「後鳥羽院御百首」・「遠島百首」の概観である。次章では、実際に何首かを取り上げ、隠岐での作歌の特色を探ってみようと思う。

(11)

前章で、隠岐での後鳥羽院の作歌について概観したが、繰り返して述べたように、それらはほとんど一般に知られていない。それでも、中には、有名な歌が数首含まれていることも事実である。その代表が、「増鏡」の内の次の一首であろう。

我こそは新島守よ隠岐の海の荒き浪かせ心して吹け

(これは「後鳥羽院御百首」の中で雑(3))

この歌は、丸谷才一氏の「後鳥羽院」(日本詩人選第十巻)の内で、次のように評されていて、氏は、これを典型的な「帝王振り」の歌として賞揚している。すなわち、

「……後鳥羽院が沖の海の浪風に「我こそは」と呼びかけるとき、それはみじめな流人として、しかも自分のため、哀願しているのでは決してなく、この島を守る者として、誰か他人のため、海に命令しているのだということ……その誰かとは荒天のため舟を出せずに当惑している漁師であると考えてもいいわけで、「新じま守」という言葉には、案外、つい先日まで支配していた日本の国全体の広さにくらべれば、こんな小島を司るくらいすこぶる易しいという自負がこめられているかもしれない。……「島守」は今日、単に「島ヲ守ル者。島人」(「大言海」と取られているけれども、遠い昔には「島の神」の意であった……おそらく後鳥羽院にはこういう語感が生きていたろうし、それに、呪術者としての帝王という古代的な心理はかなり名残りをとどめていて、両者は容易に結びついたにちがいない。すなわち「新じま守」とは着任したばかりの島の神、一首はその勇壮な神が風濤に発した号令となるであろう。」(同書十二ページ～十四ページ)

この説には首肯させられる所が多い。しかし一般にこの歌が有名になり得たのは、人々がその「帝王ぶり」に敬服したから、というよりもむしろ、その強い調子ゆえに、院の境遇の哀れさがより強く胸を打つからではなかつたらうか。「増鏡」の記事とあわせ読むとき院の涙は全く乾くことがなかつたかのようである。たとえば、「同じ「新島守」の段に、

あやめふく鶯が軒端に風過ぎてしどろに落つるむらさめの露
という歌がある。通釈をするとすれば、「邪氣を払うという菖蒲を差し飾った葺葺きの軒端を、風が吹き過ぎて行き、その風に吹かれて、にわかには降つて来た雨の半も、乱れ散るようになら落ちて行くことだ。」ともなろう。端午の節句の一場面である。ところが、「新古今集」中の院自身の次の様な歌を知る我々は、「しどろに落つる」のは、実は院の涙である、と取ることになる。

秋の露や袂にいたく結ぶらん長き夜あかず宿る月かな

(卷四秋上四三三)

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへる移れば変る嘆きせし間に

(卷一四恋四一三三三)

「むらさめの露」は涙の暗喩で、菖蒲の軒に吹く風に、院は内裏の節句のはなやかな儀式を思い出し、思わず涙がこぼれたのである。という具合に、新古今歌風の「象徴性」は、ほとんどの歌から院の嘆きを誘い出してくれる。しかし、いかに想像を絶する海上の孤島で流離の身をかこつとは言え、政治・文学上にあのよう大きい足跡を残した人物が、いたづらに、我身を嘆く歌ばかりつくっていたとは思えない。無論、そういう歌が圧倒的に多いのではあるが、そ

れでも、院が(たとえ虚勢に近いものであつたにせよ)自尊心を込めて詠んだ歌も何首かはあるはずである。少なくとも、この新島守の歌に關しては、丸谷氏の説は、極めて妥当であるように思われる。塚本邦雄氏は「菊帝悲歌」の中で、「文武」の「武」にも秀でた院の姿を積極的に描いた。それを、「新古今集」の雅びの陰で、忘れがちである。院の人物をより幅広く、大きく抱える意味でも、狭い視野でのみ見ることは不都合であらう。隠岐の地での詠についても同様である。我々は、丸谷氏の「新島守」だけでなく、院のプライドを探してみてもよいのではあるまいか。

まず、歌の前に、「新古今集」隠岐本の跋文を見てみる。

「……おほよそ、玉の台風やはらかなりし昔は、なを、野辺の草しげきことわざにもまぎれき。沙の門月静かなる今は、かへりて、森の梢深き色をわきまへつべし。……」

「たちまちにもとの集を捨つべきにはあらねども、更に改め磨けるはずぐれたるべし。」久保田氏の通釈に従うと、「大体において、宮殿に吹く風の和やかであつた昔は、やはり、野辺の草が生い茂るように、忙しい政務にもまぎれた。出家してこのように月を静かに見る今は、かえつて、この集のすぐれている点を弁別できるのであらう。」「急に元の集を捨てるべきではないけれども、更に改めて精撰したこの集はすぐれているであらう。」となる。流罪になり、出家せざるを得なかつた、その徒然に改訂を、というようなため息は、少しもない。忙しい政務を避けて、落ちついて改訂作業をしたがために、進んで出家したのだ、と言わんばかりの口ぶりである。批評家としての院は、自分の眼に絶対の自信を持っている。それは、「後

鳥羽院御口伝」の、たとえば定家評を見ても明らかである。その定家が都では、歌壇の一等者になって行くのは、手にとるよう解る。それだからこそ、この改訂作業は、院の一世一代の歌集を更に高みに置いたために、自分の意志で始めた、言わずにおれなかつたのではないか。出家は、そのために必要だつたのである。このことが、次の歌を導いてくれる。

今はとてそむきはてぬる世間に何とかたらん山ほとゝぎす
丸谷氏は、この歌と、

とにかくに人の心も見えはてぬうきや野守の鏡なるらん
を引き、「(このような)歌に接するとき、すっかり暗然として、定家が手紙の一つも書いてやればすこしは慰めになつたろうになどと思いがちなのである。」(二三五べ)と述べている。氏の論はこの後、定家の立場を探つてゆくが、ここで問題としたいのは、25の歌の院の心である。註記には、ほととぎすについて「不如帰となくなり」とある。これに従ひ通釈すると、次の様にならうか。「今はもう、といて背を向けてしまつた世の中なのに、ほととぎすよ、「帰るにしかず」だなんて、一体何を言っているんだね。」「何とかたらん」という問いかけは、強い反発の気持ちから出ているのである。表面的には、出家した身が今さら俗界へは帰らない、という心であるが、「世の中」をもう一つの意味の「国の政治」ともとれる。つまり、そこには「国の政治の権力も自分の意志で捨てたのだ。今更返り咲こうとは思っていない。」という自尊心が色濃くにじんでいるのである。

この歌から、「出家」の身ということをもう少し考えてみると、

墨染の袖のあやなく匂ふかな花ふきみたす春の夕風
などが目につく。「墨染の衣」と「花」(桜)の結びつきから連想されるのは、西行である。「新古今集」に最も多く入集(九十四首)し、院自身「後鳥羽院御口伝」で「西行は、おもしろくて、しかも心も殊に深く、ありがたき方がたき方も共に相兼ねて見ゆ。生得の哥人とおぼゆ。おぼろげの人、まねびなどすべき哥にあらず。不可説の上手なり。」と賞揚した歌人。

願はくば花の下にて春死なんその如月の望月のころ

〔新古今〕卷十八・一八四五

は、都を遠く離れた院の胸に、新たな実感をもって響いたのではあるまいか。ここには、「自尊心」とは言えないかもしれぬが、自らを、旅に死ぬことを望んだ歌人になぞらえて一首を詠む院の姿が見える。そして芳醇とも言えない桜の花が「あやなく匂ふ」のも、昂揚した院の心が、花を舞い散らせるからであらう。こうして、春の夕暮れ時は、院の内でもた一つ新しい命をもつた。

ところで春の夕暮れ、と言えば、我々は迷うことなく、

見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋と何思けん

〔新古今〕卷一春上・三六

を思い出すであらう。思えばこの歌も「帝王」としての院の氣質を表わす歌であつた。院は国見の心情で、水無瀬離宮の春の夕暮れを楽しんでゐる。自らの統治する国を賛美している。それが「増鏡」の中では、次のように歌われるようになる。

水無瀬山我ふる里は荒れぬらむまがきは野らと人もかよはで

〔後鳥羽院御百首〕中にはなし

両歌を並べると、後者はいかにも我が身を嘆く歌としか思えないかもしれない。しかし、それよりもここでは、「自分が居なくなつたから水無瀬の離宮は荒れてしまった——自分が居なければ、あの美しい離宮も何にもならないではないか。」という、やはり一種の自尊心を説みとるべきである。自分が見たからこそ、春の夕暮れはあのようにすばらしかったのだ、という気持ちが「我ふる里は荒れぬらむ」の裏には確かに在る。

同じような心の歌が他にもある。

さみたれに宮木も今やくたすらん榎たつ山にかゝる白雲 切
「五月雨が続いて、宮殿を造営するための木を朽ちさせていることだろう。その木の植わっている山には、雨を降らせる雲がかかっていることだ。」表面的には、このように、宮木の植わつた山に白雲のかかっているさまを歌つたものだが、更に宮木が宮殿そのものを表わすと考えることができる。つまり、かつて院が君臨した都の宮殿も、主人である院が居なくなつては、さぞや朽ちてしまつているのであると嘆く歌に解するのである。その嘆きは、もちろん、宮廷を、国を、憂える故の嘆きなのであって、現在の自分の境遇を嘆いているのでは決してない。

このように、一国の統治者としての院の資質は、アプリオリなものであって、その境遇の如何に関わらず發揮される。院を「帝王」と、繰り返し呼ぶ所以である。そういう見方は、或いは院を美化しすぎかもしれない。もし、そういう弊に陥っているとしたら、それは本論が、隠岐での院は常に嘆き暮らしていた、という一般の印象への反発を契機に書かれたからである。後鳥羽院は、やはりどこに

居ても彼自身であるということが、いくらかは解つたような気がするので、一応本論を終わらうと思う。すなわち、拡く知られてはいないけれど、数多くの歌を残していること。そして、その歌は院の変わらぬ本性をその境遇にも関らず示しているということ。話が飛躍するけれど、この事実が、私に「短歌」という短詩型文学を改めて信じさせてくれるような気がしている。私自身の為に、そのことを喜び、感謝したい。

(了)

〔註一〕…「後鳥羽院御百首」の百一首の歌に、便宜上(1)から(1)までの番号を付してある。

尚、その他、歌集名に続けて番号が書いてある場合は、国歌大観のそれである。

〔註二〕…小原幹雄氏の『校異遠島百首』によれば、

「旧島根県師範学校郷土室本」

「島根大学文学部国語学国文学研究室本」

「桑原羊次郎氏蔵本」(二種)

「歴代御製集本」

「村上家本」

「島根県史本」(出雲大社の北島家蔵本に拠っているらしい)

「隠岐島史本」

などがある。

〔註三〕…事実、次の様な、意地になってプライドを守るがごとき歌もある。「問はるゝもうれしくもなし此海を渡らぬ人のなけの情は」⁽¹⁰⁾

(島根県立隠岐高等学校教諭)